



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 2018年以降ハリウッド映画における華僑華人表象についての考察   |
| Author(s)    | 楊, 人維   |
| Citation     | グローバル人文学研究交流会要旨集. 2025, 1, p. 42-44   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/100481">https://doi.org/10.18910/100481</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 2018年以降ハリウッド映画における華僑華人表象についての考察

楊人維（言語文化学・M1）

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景と目的

ハリウッド映画は誕生期から西洋中心主義のイデオロギーを潜めており、帝国主義が終焉を迎えた後でも他人種を他者化し、西洋人種の優越感や国民的帰属感を動員するメディア装置として機能してきた。長年にわたって、大衆文化におけるステレオタイプ的な描き方へ不満を感じたマイノリティは自己表象の権力を取り戻ろうと努力してきたが、この数年はメインストリームに受け入れられ、トレンドになりつつあるように思われる。

その中でも、アジアをテーマにした作品に注目が集まっていることが注目に値する。1993年以来25年ぶりにメジャー・スタジオが配給し、主要キャストがアジア系の俳優で占められた『クレイジー・リッチ』（2018）が大ヒットした後、アジア人・アジア系アメリカ人、特に中国系を主役とした映画が急増していることが昨今のハリウッドの傾向である。また2023年に開催された第95回アカデミー賞で7部門を受賞した『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』の影響で「中国系コンテンツ」のブームの継続が予想される。

2018年以降の映画は、従来に比べて、より多くの中国系俳優・製作者の参加によって表現方法が一新された、また大手会社が製作と配給を行うため、大衆文化における華人文化または中国系アメリカ人、アジア系アメリカ人のイメージを再構築する上で重要な意味がある。本研究はいくつかの作品を取り上げ、映像分析を行うことで、華僑華人のイメージがどのように新しく表象されており、そこにはどんな文化的な意味があるのか、またこうした作品が過去の偏見をなくす一方で、新たなステレオタイプを生み出してしまう恐れはないかどうかを研究したい。

### 1.2 研究対象と方法

まず、これまでの華僑華人の表象の変容を整理し、歴史的な視点から研究を行う。次に、①2018年以降、中国人や中国系移民を主人公にした映画②ハリウッドのメジャー会社やミニ・メジャー会社、あるいは大手ストリーミング・プラットフォームが製作・配給した映画という2つの条件を満たした作品を分析対象として選び、前の映画を比較分析しながら、これらの映画におけるハリウッド映画としての華僑華人のイメージの共通の特徴を整理した。

表1 研究対象とするハリウッド映画リスト

| 時間   | 映画                        | 配給                                   |
|------|---------------------------|--------------------------------------|
| 2018 | クレイジー・リッチ!                | ワーナー・ブラザース映画                         |
| 2019 | フェアウェル                    | スタジオA24                              |
| 2020 | タイガーテール -ある家族の記憶          | ネットフリックス                             |
| 2020 | ハーフ・オブ・イット: 面白いのはこれから     | ネットフリックス                             |
| 2021 | シャン・チ/テン・リングスの伝説          | ウォルト・ディズニー・スタジオ・モーション・ピクチャーズ         |
| 2021 | ウィッシュドラゴン                 | ソニー・ネットフリックス                         |
| 2022 | 私ときどきレッサーパンダ              | ウォルト・ディズニー・スタジオ・モーション・ピクチャーズ Disney+ |
| 2022 | エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス | スタジオA24                              |
| 2023 | Joy ride                  | ライオンズゲート                             |
| 2023 | Quiz Lady                 | Hulu                                 |
| 2024 | Didi                      | Focus Features                       |
| 2025 | Karate Kids legend        | ソニーピクチャーズ                            |

それを踏まえた以上、作品群から『クレイジー・リッチ!』(2018),『フェアウェル』(2019),『シャン・チーテン・リングスの伝説』(2021),『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワーンス』(2022)という代表的な4作を取り上げ、表象と文化生産の過程における文化・社会・政治的力学を捉えつつ、物語テクストに構築される表象分析を中心に行う。ポストコロニアリズム理論、「人種」と「ジェンダー」に関する理論などを援用して複合的に分析する。

## 2. 映画史における華僑華人像の変容

村上(1993)の分析と増田(2004)の年代分けを基にしてアメリカ映画に現れた「中国人」イメージの変遷を整理した。

### 2.1 サイレント映画時代～戦前

B級刑事映画とフォーチュン・クッキー・ミステリーにおける西洋人によるオリエンタリズムのファンタジーとしての「東洋人」表象は大きく以下のように分類される。「フー・マンチュー」は典型的な「悪い東洋人」の描かれ方であり、邪悪でミステリアスな悪役は「黄禍」という東洋人に対する脅威の感情が反映されたものである。一方、「チャーリー・チャン」という知性や能力を備えている探偵は「良い東洋人」の典型である。また東洋人女性は「ドラゴンレディー」あるいは「チャイナドール」と二分法的に描かれたとされる。

### 2.2 戦中～70年代

Dong(2022)によると、ブルース・リーの登場によって、アジア人に対する「弱者」の固定観念が打ち破られ、ポジティブでパワフルな「カンフーヒーロー」が現れたが、アジア人に対する偏見は依然と根強く存在したという。また、優等生だが人間味の少ない持ち主「モデルマイノリティ」像もこの時期にメディアを通して強化されたと指摘されている。(Ono, 2009)

### 2.3 80年代以降

アジア系が自ら映画を作り始めた時代とされる。ウェイン・ワンなど中国系の監督たちは、中国人や中国系移民の生活をテーマにした映画を数多く製作していたが、大多数は自主映画である。メジャー会社の作品での中国系キャラクターは主にアクション映画に登場し、ジャッキー・チェンが新世代の「カンフーヒーロー」として活躍していた。

## 3. 2018年以降の映画における華僑華人キャラクター表象の特徴

### 3.1 視覚的表象：

2018年以前の映画にはまだ「ホワイト・ウォッキング」が散見されるが、2018年以降、基本的にアジア系の役にはアジアの俳優が起用されている。だが、中国系・韓国系・日本系の俳優が多く、それ以外の東アジア系が少ないのも現状であり、具体的な国籍が厳密には一致しない場合も存在する。

### 3.2 聴覚的表象：マルチリンガル

英語がメインであるハリウッドで、他の国籍の登場人物は字幕を使わず英語で話すことが一般的であり続けてきた。だが、2018年以降、ナレーションを中国語で行う、英語字幕付きのシーンが激増した。また主人公には、公的な場では英語、私的な場（家族）では中国語という使用言語の切り替えがよく見られる。ここで特筆すべきことは、中国語の中には北京語、広東語、閩南語といった細分化した方言が含まれ、華僑華人の多様な出身地とアイデンティティがリアルに表現されていることである。

### 3.3 性別の表象：強い女性キャラクター

上記の映画の70%は女性が主役で、能動的で独立しているイメージの人物が多い。また主役と対立する役も家庭で発言権を主導する母親/祖母として表現されることが多い。

## 4. 2018年映画における華僑華人アイデンティティの特徴

これらの映画は、叙事構成が典型的なハリウッドスタイルであると同時に、巧みに華人華僑の叙事をその中に融合させている。

### 4.1 核心な対立は家族の中にある

アクション映画でも、主人公に対立するのは外部の脅威ではなく、家族内の家長たちである。家父長制の伝統がこれらの映画において幾度も強調されたが、「西洋（自由主義）が東洋に勝利する」という内包された西洋中心主義の価値観から、「文化には優劣がなく、互いに吸収し学び合う」という視点に変化し、最後にはクィアなキャラクターを通じて、人種と文化が重層的に交わるディアスボラの独自の主体性を表現する。

また、家庭という私的な側面を舞台にし、オリエンタリズムの公的権威と対局し私的物語を語る。よって、華僑華人のイ

イメージを脱構築することになった。

#### 4.2 想像共同体としての故郷、揺れるアイデンティティ

主人公は2つの文化の狭間の存在として、自分の二重アイデンティティに悩まされている。最もよくそれを体現しているのが、頻繁に登場するテーマである「帰国」である。

映画分析を通じて、海外華人にとって、祖先の出身地としての「故郷」中国は、「間接的な経験」に基づく文化的・民族的アイデンティティの対象として重要性を持つが、実際には「直接的な経験」に基づく生まれ育った場所が現実的な故郷であると認識されていることを明らかにした。また、『JOY RIDE』では、主人公は自分が華僑・華人であると認識していたが、結末で自分が実は韓国人の子供であることが判明し、文化的アイデンティティと民族的アイデンティティとの不一致が描かれている。この点は、「故郷としての中国」が一種の「想像の共同体」として機能していることを示すとともに、華僑華人の文化的アイデンティティが国家の枠組みを超える流動性とハイブリッド性を持つことを表現している。

### 5.まとめと今後の展望

これまでの研究ではハリウッド映画における華僑・華人表象の多様化を肯定的に議論してきたが、これからは新たなステレオタイプの形成の可能性について批判的な視点で掘り下げたい。具体的には、強い女性のキャラクター設定は、「タイガー・マザー」という新たなステレオタイプに陥っていないかどうか。また、帰国の場面で表現される「故郷」には異国趣味的な視線がまだ残っていないかどうか、そして、主人公たちが送る「異文化融合」的な生活も白人にとってある種の「エキゾチックな光景」になっていないかどうかに関しては、より深い検討が要請される。

アメリカ社会における中国人の状況やマイノリティの抗争運動も、こうした表象の変化と無関係ではないと推測し、本研究はハリウッド映画産業における中国系・アジア系の境遇を考察したい。また、メディア伝播の視点から、国際ストーリーミング配信会社(ネットフリックス、Disney+) やミニ・メジャー映画会社(スタジオ A24)の戦略などにも目を配りつつ、研究を展開していきたい。

### 6.参考文献

- Dong et. al. (2022). *The Development of Asian Characters' Stereotypes of Ethnic Identity and Cultural Representation in American Films*, Advances in Social Science, Education and Humanities Research, volume 664 Proceedings of the 2022 8th International Conference on Humanities and Social Science Research.
- 川口恵子 (2010). 『ジェンダーの比較映画史 国家の物語からディアスボラの物語へ』彩流社
- 増田幸子 (2004). 『アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷』大阪大学出版会。
- 村上由見子 (1993). 『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』朝日新聞社。
- Ono et. al. (2009). *Asian Americans and the media*. Polity.